



TITLE:

<雜録>北京通信

AUTHOR(S):

今西; 小野

---

CITATION:

今西 ...[et al]. <雜録>北京通信. 東洋史研究 1939, 5(1): 77-82

ISSUE DATE:

1939-10-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/145656>

RIGHT:

## 北京通信

### 文淵閣・壽皇殿・皇史

#### 宸を觀るの記

北京の故宮中には一般に開放してゐない建物で有名なものが相當にあります。中にあつても特に文淵閣・壽皇殿・皇史宬などは是非一度觀ておきたいものと、小野學士の肝いりで、北京在住の同人數名特別觀覽をはかつて貰ひました。それに折よく御滯燕中だつた那波先生に加はつて頂くことが出來たのは嬉しいことでした。第一日、九月十三日にはまづ、

文淵閣を見ました。この閣の位置は文華殿の眞後の所ですが、今は本閣と文華殿との中間に壁を造つて通行を閉してしまつてゐるので、閣の後方から入つて行きます。閣は乾隆三十九年の築建、浙江鄞縣の范氏天一閣に倣つて造られたものと言はれ、二階建であることが一寸異觀です。周知の如く、この閣はもと四庫全書を收藏した所で、その始末を書いた乾隆御製の文淵閣記は閣東の碑亭中に鐫ら

れてゐます。四庫全書中でも特に立派であつたらうと思はれるこの三萬六千冊は民國二十二年に南遷して、今は閣裏わびしく架棚を残すのみです。閣前の池は玉河の水を引いたものと云はれます。閣を北に出て東よりのあたり、丈なす雜草中に荒れはてた數棟の房屋が見えてゐますが、これはもと閣詰め諸臣の詰所だつた由であります。尙、明にも文淵閣ありその址は今内閣大庫の西庫のところに比定されるところです。第二日、十四日は、

壽皇殿です。これは景山の眞後のところ、景山に上ると全殿手に取る様に見えます。本殿の制は太廟に同じく、清朝時代には列朝の帝后像を供奉した所です。始め景山の東北方にあたつてあつたのですが、乾隆十四年に現位置に改建すると同時に大いに規模を擴大しました。景山五亭の中央亭は正しく殿の眞南にあたつて望まれます。五亭が建てられたのは乾隆十六年のことですが、これで以て見ると殿の移建と共に五亭の築造も考へられてゐたものゝ様です。餘談になりますが、今西が本誌前號に紹介した「乾隆北京全

圖」はこの壽皇殿を現位置に現はして、五亭は未だ描かれてゐないから、大抵乾隆十五年の頃に繪成されたものに違ひないといふのが、全圖の年代を考證した曹宗儒君の考へたところで、こんなことで壽皇殿は今西にとつて興深いところでした。

壽皇殿に就いては一つこんなことが言はれてゐます。それは壽皇正殿（言ふまでもなく帝后像を祀つた殿です）の間數は九つだが、この數は清朝入關後の順治から光緒に至る朝數九つに相符する、丁度間數だけで清朝は亡びたといふのです。何故こんなことが言はれるかといふと、壽皇殿の建築材料は全部明陵から折取し來つたものだといふ言ひ傳へが昔から行はれてゐるためです。この言ひ傳へは北京の或る舊誦に出るところです。

歴代帝后像は今も南遷してしまつてゐて見るに由ありません。清皇室では嘗てこの像を索要して故宮博物院と争ひ、問題は法院にまで持ち出されたが、まだ免がつかないうちに現物は南遷してしまつて、今は建物ばかりがボツネンと取り残されてゐるのです。最後第三日の十五日

には、

皇史宬に行きまし

た。これは今南池子の南より、道の東側にあります。明の嘉靖十七年秋七月に建てられて以後清朝には改建のことなく、明の實錄寶訓を放り出して、清の實錄聖訓玉牒などを藏置した場所です。正しく「これを金匱石室に藏す」の言葉の如く、建

物は一切扉に至るまで厚さ一尺にも近からうと思はれる石材を用ひ、宛も火藥庫でもあるかの様な感じですが。正門の突きあたりが一番大きい正室で、ここには清十一朝の實錄を収めました。所謂皇史宬實錄で、實錄中でも特に立派な大紅綾本です。室内に高く石床を築き、この上に高さ四五尺の大金龍匱を百數十個並列し、實錄はこの匱の中に収められてゐたのですが、今は南方に運ばれて空匱のみが残つてゐます。匱は楠の木に寫眞で御覽に入れる通りの龍紋真鍮板をはりつけ

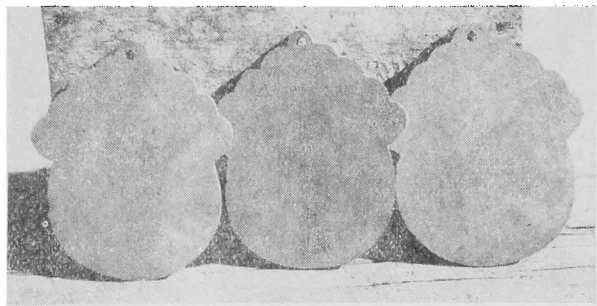


皇史宬金龍匱

たものですが、どうも、も一つ立派だといふ感じはしませんでした。匱の一つを開けて見たら、中からこれ亦寫眞で御覽に入れる通りの牌數個が出てきました。

真鍮牌で長さ二寸位、表に「高宗清第五匱」「聖祖漢第四匱」「文宗蒙第二匱」など書いてあります。清朝では、滿・漢・蒙三體の實錄を修めました。高宗清第五匱は高宗滿文實錄第五匱の意味です。漢・蒙は同じく漢文實錄、蒙文實錄の意味です。言ふ迄もないでせうが、各帝とも清・漢・蒙の三體あるのです。牌の裏には「第

十四行八」といつた數字が見えます。これは匱の排列順序を示したもので、右の數字ならば第十四列第八番目の匱といふことです。牌は以前は匱の外側に掛けられてあつたわけですが。正室の前庭東西にも宇があり、夫々玉牒聖訓などを藏置したところと言はれますが、これも今は一



金龍匱に掛けつけ牌

切南遷して室中何物も留めません。但しこの兩室は只何もないといふ話だけで實際には見ませんでした。正室の東側に碑亭があり、嘉慶年中に玉牒を景山に移置した旨の御聖記があります。

これで三日間の有益な見學を終り、一同皇史宬前の石階に立つて記念撮影をしました。最後に小野學士の御配慮と故宮側の曹宗儒、賈樂山、張文貴諸氏の格別の御盡力とに對して厚く謝意を表する次第です。次に小野學士に建築方面から見た參觀記を書いて頂きました。御熟讀願ひます。(一四、九、一九 今西記)

## 文淵閣と壽皇殿と

### 皇史宬と

文淵閣は紫禁城内でも異色のある建築ですから一見直ちに其の所在がわかる程です。緑と黒紫の二種の琉璃瓦で屋根をふき、壁は塼積みで、朱色を塗つては居



皇史宬前庭にて記念撮影

ません。外部に表はれた柱には緑色を塗り、書籍其他を描いてある枋の彩畫も著しく緑や白が用ひられて居ます。私共の行つた日は曇つて居たので、其の爲もありませうが、建築が與へる感じは沈靜と冷寂とでした。かうした寒色を特に選んだのは厭勝の爲ださうです。重簷二層、

大屋根は入母屋、下簷は前後のみに設け又廊も前後の二面のみに作つてあります。注意しなければならぬことは正面六間あると云ふ點です。これは手本となつた寧波の天一閣が矢張り六間である爲で、後者は易經に見える天一生水地六成之と云ふに基き、支那建築では例外な偶數間を採用したものだとのことです。然し文淵閣の場合では第六間はどちらかと云ふとはんの形式的で、西端に當る此の間は他の間隔の半分もない程です。それで第三間(明間)が中央に位し、石階を初め石橋等これに向つて作られ、この南北の中心線が文華殿のそれと合致して居ます。

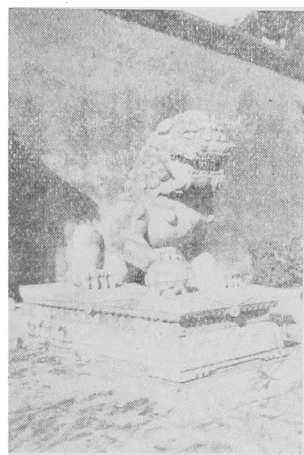
閣内に入ると中央に御座があります。上には漚流微鑑の額が掲げられ、柱には挿架牙籤照古今。開編芸氣吐芳芬など、ある聯が下つて居ます。何れも乾隆御筆で、其地には雲龍を浮彫して塗金してありますが、感じは甚だあくどいものです。四庫全書を納めた書架は上中下の三層に並んで居ます。従つて外觀と異り、内部は三階となつて居る譯です。即ち下層が二段となつて居るのです。この點も

天一閣とは相違して居る由。

閣の左側に碑亭があります。これが乾隆三十九年御製滿漢二體の文淵閣記のある所です。碑は方形臺座に立ち陰には同四十七年御製律詩が刻されて居ます。亭は四注屋根ですが、其角稜の示す曲線が柔かで、北方には珍らしいものです。

閣前の池をはさんで相當太くなつた松が植つて居ましたので、これに就いて案内の賈氏に「禁中では松樹を忌まざるや否や」と問ふと、簡單に然りとのみ答へました。これも亦厭勝を意味するものではないでせうか。博雅の御示教に俟つ次第です。

文淵閣に就いては營造學社で出版した文淵閣藏書全景と云ふ書があります。これに依ると乾隆三十九年杭州の織造の寅著をして天一閣を調べさせ、それに基づいて同年十月頃起工、四十二年夏に落成したとのことです。圓明園の文源閣も同時の建築ださうです。然し前者は場所がせまいので、折角の假山（太湖石で作つた立派なも

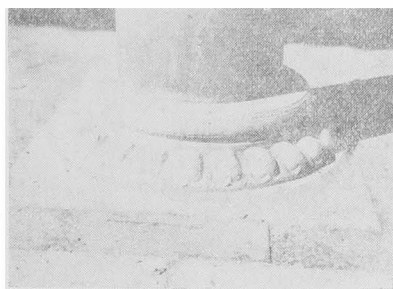


子獅の前殿皇壽

のです）池水もごちやくとして居ます。帝もこれを痛感されたと云ふが、どう仕様もなかつたのです。然し何が幸か、これが却つて今日猶夏草生ひ茂る中に睡つて居る次第です。

蛇足ですが文淵閣藏書全景の圖版中三色版のものは色彩が出鱈目でなつて居りません。

壽皇殿はもと景山の東北隅にあつた由で、現位置に建てられたのは乾隆十四年のことです。今の建物は景山中峰の直北正陽門と地安門とを結ぶ線上に在ります。朱壁黃瓦の高い垣の南面には正面と左右とに牌樓を造り、一對の石獅子を配してあります。垣には琉璃磚の三座門が



石礎柱前殿

設けてありますが今は閉ぢた儘です。

私共は西側の便門から入りました。門内から一人の老人が顔を出しましたが、あとで聞くと宦官の由。更に一門をくするとやうやく壽皇門の前に出ます。此の門は正面五間、登階三道、左右に又、小門があります。壽皇殿は此の後方に建ち石欄干を廻らした壇臺上に重簷四注單層九間の偉容を示して居ます。斗棋雀簷は乾隆建築の代表的様式でありませうが、殊に注意を惹いたのは南面前列の礎石で蓮華座に太鼓を現はしてあるのが面白いと思ひました。

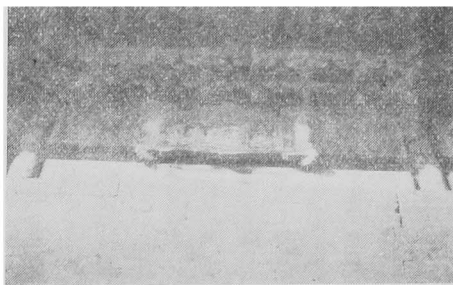
殿内に入ると正面及び左右に一ぱいに屏障がならんで居ます。それには恐らく刺繍だと思はれますが中に龍を側に鳳凰を表はした布が張つてあります。もと天子の畫像が中央に、后妃のが左右に掲げられて居たのださうです。都合十一個の屏障で、これで殿内は一ぱいになつてしまつて居るので、これでは宣統帝のを置く場所に困ることになり、成程と柄にもない御幣を擔いで見たくなりました。

殿の左右に正面三間入母屋の山殿が建ち、前に當つて各御碑亭があります。更に向ひ合つた各五間の配殿或は琉璃瓦製の燎爐などもあります。

元來壽皇殿は太廟に倣ひこれを約したものだとのことです。約すとは恐らく規制を小にした意味でせう。然し後者に於ては前中後の三大殿が縦列して居るのに對し、後者は壽皇殿を中に山殿を左右にした横列となつて居るのです。

私共は拜觀を終つてから景山の柏樹の下で茶をのみながら暮れ行くまで語り續けました。初秋の紺碧の空の下、數百年の樹木の蔭で雜談した印象が壽皇殿のそれよりどうもはつきりして居る。呵々。

皇史宬は南池子の南口、街路の東側に在ります。私共は西側の入口から入りましたが、正門の様子は殆んど壽皇殿の場合と變りがありません。便門を入つて北面すると正面には大殿があり、其左右前



皇史宬及斗棋

には配殿が向ひ合ひ、猶大殿の左側に御碑亭があります。此の大殿が所謂皇史宬です。切石を積んだ壇があり、これに石欄干を廻らし前と兩側に登階のある月臺をひかへて殿が建つて居ます。正面九間黄瓦の四注ぶきで、南面には五所の入口

を設け、東西面に各一所の窓を作つてあります。戸も窓も皆アーチ形をなして居り、欄額の部分には何等の裝飾もありません。殿壁は皆な壇を積み、これは文淵閣の場合と同様、彩色を塗つて居りませんが、これは何れも石作らしく、曾つては彩繪を施した様です。斗棋は所謂單翹單昂式です。殿の中央部に石額があり、之に滿漢で皇史宬と記して居ます。

厚さ八寸に近い疊二枚もあらうかと思はれる一枚石の扉を開いて中に入ると天井は悉くアーチです。山西地方なら普通の住居にもこれを利用して居る所があるので別に珍しくはありませんが、北京では門以外には殆んど見受けなない構造で、而も複雑して居ります。中部に一段高い石壇を設け、その南側に山様、雲、龍鳳等を浮彫してあります。石壇の上に所謂金櫃が列んでゐます。これは打出しらしい飛龍を現はした眞鍮製の櫃で、其數百五十餘個もありました。奥まつて兩端に二碑がありました。暗くて讀んで見る氣も起りませんでした。それに乾隆庚午の年號がありました。私は此處を拜觀

して金櫨石室の意味を如實に理解し、また。

配殿も亦塼築です。屋根は硬山（切妻の一種）で正面五間、入口を三所に開いて居ます。枋上に當つて通氣孔の様な小窓が一行に並んで居り、内部の構造が見たいのでしたが、案内者が鍵を持参しなかつたので駄目でした。

皇史宬に就いては「春明夢餘錄」卷十三に、

皇史宬在重華殿西。建於嘉靖十三年。門額以史爲文。以成爲宬。左右小

## 王應麟の政術觀

「王者といへば周の文王より高邁な王者はない。覇者といへば齊の桓公より高邁な覇者はない。この人達は皆賢い臣下を能く用ひた結果はじめてその名聲を後世にのこすことが出来たのである。」これは漢の高祖の詔の一節である。漢の宣帝は「漢の朝廷には漢の朝廷としての定まつた主義がある。漢の朝廷の政治のやり

門曰諡廡。以龍爲諡。皆上自製字。

而手書也。中貯三列朝實錄及寶訓。宬

中四周上下俱用石鑿。中具二十室。

永陵（嘉靖帝）定陵（萬曆帝）各占二室。

と見えて居ます。これに依ると嘉靖十三

年の建築です。猶御碑亭の滿漢二體嘉慶

十二年重修皇史宬記には年代が經つて漸

くいたんで來たので修理した由を記して

居ます。偕て其の修理と云ふのはどの程

度だつたでせうか。私は今後の精密な調査に依つて、このものから明中葉の建築

の一標準が得られるのではあるまいかと

期待して居る次第です。

皇史宬には足の踏み所もない様に灌木

雜草が茂つて居ました。意地の悪い荊棘

類は服の上からでもさし込んで私共を悩

ました。那波先生は鹽でもまいて置

けばかうまでならないであらうと申され

ましたが、少しの注意さへ加へるならば

此の様な建築は殆んど永久に近い存在を

續け得るのに、甚だ遺憾に思はざるを得

ません。これは壽皇殿や文淵閣の場合も

同様でした。

（一四、九、二二記 小野生）

方は本來王道と霸道とを雜じて行ふものである」といつてゐるが、思ふに漢の政治のやり方が、このやうに、王道と霸道とを混用することはすでに、高祖の前掲の詔に現はれてゐるのである。劉向が賈誼をほめたことばに「古代の伊尹管仲といへども、この賈誼より遙かに秀れてゐた」とはいへまい。」とあるが、伊尹と管仲とがどうして肩を並べて同じ範疇に入れられ得ようか。林少穎は漢代

のかゝる傾向に對して「王道と霸道との辨別をしない考へ方は漢代が一番甚しい、人物の型に範疇を與へる場合に、首肯し難い分類をやるのは漢の儒學者が一番甚しいと思ふ。どこまでも王道を尊んで霸道をしりぞけ、道義を唱道して功利的なものをいはない漢の學者といへば、たゞ一人董仲舒があるばかりだ。」と論評してゐる。（困學紀聞卷十二攷史より譯出）（宇都宮）